

## 「問い」をもち、進んで表現する子どもの育成を目指して

### 1 はじめに

研究主題「自分の考えをもち、進んで表現する子の育成」を目指し、今年度は、「説明する力を育てる」ことに重点を置いた授業実践を推進してきた。誰に対して、どのような手段で説明させることによって、どんな力を付けさせたいのかを明確にしてから、自分の考えを説明させるように心掛けてきた。

### 2 目指した子どもの姿

学習したことを、順序よく、相手に伝わるように説明することができる子

学習したことを組み合わせながら、「もし」や「～だとすると」などの類推的な表現を使って、考えることができる子

### 3 具体的な手立て

#### (1) 子どもが自ら「問い」をもつ課題を設定する。

説明したいという思いをもたせるためには、子どもが自ら解決したいと思う「問い」に出合わせる必要がある。解決するにあたって、自分が見つけたことを友だちに伝えたいという思いが、友だちに分かるように、よりよい表現方法を用いて説明しようという意欲にもつながると考える。さらに、単元で学習した内容を組み合わせるだけでなく、類推的な考え方が必要になる課題をあたえ、「もし」や「～だとすると」などの表現を引き出す。

#### (2) 説明する場面を工夫する。

誰に何のために説明をするのか、説明の目的を明確にするために、授業の後半に、「問題の説明書を作り、隣のクラスの答え合わせに使ってもらおう。」と意欲付けをする。自分たちが解決するにあたり、迷ったところは、友だちにとっても分かりづらいただろうと考え、「問い」の解決部分は特に分かりやすく書くことを心掛けさせる。

#### (3) よりよい表現方法に出会う場面を作る。

できあがった説明書をみんなで見合う場面を作る。それにより、それぞれの説明の仕方のよい点を褒め合い、自分の説明に生かすことができるようにさせる。自分の説明のよい点を友だちから褒めてもらうことによって、自信を付け、表現の楽しさを味わうことができると考える。また、自分では気づかなかった表現方法を知ることができ、表現の幅を広げることができると考える。

### 4 授業の流れと子どもの変容（単元名 「大きな数」 10 / 10時間）

単元で学習したことを生かし、大きな数の計算をする。

T 大金（6238660 円）の入った鞆が落ちていました。落としたという人が 3 人現れました。本当の落とし主は誰かな？ぴったり大金の額と同じになることを言っている人を探そう。

A 私の鞆には、千円札が 620 枚、一万円札が 3 枚、100 円玉が 86 枚、10 円玉が 6 枚入っていました。

B 私の鞆には、一万円札が 620 枚、千円札が 38 枚、

・クイズ形式の課題だったので、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。



100円玉が6枚,あと詳しくは覚えてないけど小銭が4枚入っていました。

C 私の鞆には、100万円の束が5束、10万円の束が12束、100円玉が6枚、10円玉が6枚、あと袋にお札が11枚入っていたわ。

C 習ったことを使えばいいんだな。お札を数字に直して、大きな数のたし算をしよう。Aさんは違う。

分からない部分を、類推的な考え方を用いて考える。

C Bさんは、小銭の部分が分からないぞ。どうしたらいいんだらう。

C 足りない金額を考えればいいんだな。

C もし、50円と10円だとすると、小銭は2枚、もし、5円玉があったとしたら小銭は3枚か…小銭4枚では60円の組み合わせができない。Bさんも違う。

C Cさんは、お札のところが分からないぞ、足りない38000円をお札11枚で作ってみよう。

C もし、一万円札と五千円札と千円札だったら…一万円が3枚、千円が8枚でできるぞ。きっとCさんだ。

T 他の組み合わせでもできないかな？

C もし全部千円札だったら…もし五千円札がなかったら…やっぱりこの組み合わせしかない。Cさんだ。

順序よく説明し、よりよい表現方法に気づく。

T Cさんが落とし主であることを、隣のクラスの人が分かるように説明しよう。

C 100万円の束が5つで500万。10万円の束が12個で120万。100円玉が6枚で600円。10円が6枚で60円でもそれでは、38000円足りない。お札が11枚だから、1万円が3枚で3万。1000円が8枚で8000円だとできる。全部合わせると6238660円で、落としのお金と同じ。だから、Cさんです。

T みんなの説明書のよいところを見つけよう。

C ○○さんのは、図と説明文が両方あって分かりやすい。

C ○○さんは、式もかいてあるから分かりやすい。

C 最後に、「だから、落とし主はCさんです。」と書いてあるからいい。僕も付け足そう。

C ○○さんのすごい！大きい数から順番にかいてあるから分かりやすい。

・はじめに、大きな数を読む、たす、ひくなど学習したことを使えば解くことができる課題を与えた。その結果、見通しをもち、習ったことを使えば解ける良さに気づくことができた。

・次に、曖昧な課題を与えることによって1問目との違いに着目し、「今度は分からないところがある、どうしたらいいのかな。」と、本時の「問い」を見つけることができた。

・類推の場面では、お札の枚数と金額の両方が条件に合うように、いろいろな組み合わせを考え、正解を見つけることができた。考え方が曖昧だった子も、2問目で他の子どもの説明を聞いて解き方を理解し、3問目で自力解決をすることができた。



・1通りで納得するのではなく、他にも組み合わせがあるのではないかと、何回も考える子どもの姿も見られた。

・説明文を書かせる前に、隣のクラスは未習であること、答え合わせにみんなの書いた説明書を使うことを話すと意欲的に取り組むことができた。

・説明文を投影し、みんなで見せ合うことによって、自分の書き方との違いや友だちの良さ、よりよい表現方法等に気づくことができた。



